

## 発刊にあたって

豊田市矢作川研究所所長  
松武義聰

皆様方には、日頃から豊田市矢作川研究所に対して、多くのご意見、ご指導そして支援を賜わり、誠にありがとうございます。お蔭様で年報の発行も今回で6回目を数えるに至りました。発足以来生態系の実態調査を行ってきました。調査にさいしては、地元の人達の応援を頂くことで、効率よく作業ができ、また、新たな知識をも得ることができました。

一方、平成12年9月の東海豪雨で矢作川は一変しました。溪流や山腹の崩壊等によって、多量の土砂や立木が流出し、被害をより大きくしました。沢山の橋が流失し、水衝部の護岸は欠壊し、河床には異常なまでの土砂が堆積しました。一斉に災害復旧工事が実施されているために、河川の汚濁が長く続いております。復旧に当っては気を使いながらの作業現場もありましたが、各地からの応援もあってか、濁水の流出防止が徹底されていない現場もありました。

矢作川研究所では水質調査や、これらの災害が及ぼした実態調査をも行っております。矢作川は、洪水時にはまさに破堤しそうなぐらいの流れとなります。しかし一方で、平常では自然浄化が出来にくい程に、ほそほそとした流れの川になります。このような水量の少ない流れの川に上流からの汚水が続くと、生物は苦しい生活をしいられることとなります。そのため、当研究所が行う日常的なこれらの調査は生態系を維持するのに重要な仕事だと考えます。

No.6を公表することで、多くの人達が矢作川の現況を身近な問題として認識し、豊かできれいな水を確保するためには、総合的な流域の管理と利用する人達のモラルの向上がいかに大切であるか伝えることができれば、と思っております。この年報誌を多くの方に活用して頂き、河川環境保全のための対策につながることを期待しております。